



城

第六十八回

水戸城

～佐竹氏の常陸統一と関ヶ原の裏側～

深草 祐一

水戸城は徳川御三家のひとつ水戸徳川家の居城として有名です。黄門様として知られる二代藩主徳川光圀、烈侯と呼ばれた幕末の徳川斉昭、そして斉昭が設立した弘道館での教育から広まった尊皇攘夷運動といった江戸時代の歴史が思い浮かびます。しかし今回は、それに至る以前の常陸国の歴史、特にこの城の名を水戸城と改めた佐竹氏についてご紹介したいと思います。

馬場城時代（佐竹氏入城以前）

水戸城は、北の那珂川と南の千波湖を天然の堀とする段丘の先端に立地しています。かつては馬場城と呼ばれ、大掾氏惣領の馬場氏が居館を置いたのがはじまりであるとされています。大掾氏は、平将門の乱を鎮圧した平貞盛の流れをくむ一族で、代々常陸の国衙で大掾職を勤めたことから大掾氏と称されました。一方、常陸国北部で常陸太田を中心に勢力を持っていたのが八幡太郎源義家の末弟の源義光を祖とする常陸源氏・佐竹氏でした。ちなみに甲斐源氏・武田氏も同じく源義光を祖とする同族です。佐竹氏は、源氏ではありましたが常陸国において平氏である大掾氏と良好な関係にあり、大河

ドラマ「鎌倉殿の13人」でも描かれていたように、源頼朝軍に攻められ、後に服属した経緯があります。鎌倉時代の常陸国は、守護の小田氏、大掾の馬場氏が威勢を振っていました。しかし、北部で勢力を保っていた佐竹氏は、鎌倉幕府が倒れ、南北朝の対立が起こると、小田氏、大掾氏等が南朝方に付く中で北朝方に付いて、やがて関東公方の下で関東八屋形といわれる名家に列せられることとなります。ただ、室町幕府は不安定で、足利氏の内紛に巻き込まれた佐竹一族間の争いもあって、佐竹氏は常陸を統一するほどの力を持つことはできず、旧来の小田氏、大掾氏の他、配下である江戸氏も抑えきれませんでした。そして、上杉禅秀の乱に乗じて配下の江戸氏が馬場城を奪い、ここを拠点として常陸中部で独自に勢力を振るようになります。

佐竹義重の躍進

佐竹氏が遅ればせながら戦国大名として躍進したのは、佐竹義重の時でした。その強さから後世に鬼義重と言われた佐竹義重は、父の代から関係を築いていた上杉謙信と連携し、小田氏を攻めて所領を奪い、さらに下野、陸奥南部にも進出しました。しかし、勢力を拡大させるということは、他の大きな勢力と直接ぶつかるということでもあり、南は相模の北条氏政、北は会津の蘆名盛氏という強力な敵と同時に戦わなくてはならなくなります。そうした難しい状況の中でも、佐竹義重は、過去に敵対した勢力とも姻戚関係を構築して対抗していき、蘆名氏とも当主の代替わりを機に同盟を結んで、伊達領より南の奥州までほぼ勢力下に収めます。そして、人取橋の戦いでは蘆名氏との連合軍で伊達政宗を破り、あわやというところまで追い詰めました。しかしこの時、馬場城の江戸氏が不穏な動きを見せたことから、急遽常陸に戻らざるを得ず、政宗を討つ千載一遇のチャンスを逃しています。これ以後、勢力を回復した伊達政宗の勢いを抑えることができませんでした。他方、南の北条氏ですが、本能寺の変によって、西からの織田、徳川の脅威が低下すると、よりいっそう北関東への進出を強めてきました。



常陸国周辺図

これに対抗するために、佐竹義重は羽柴秀吉に後ろ盾となってくれるように求めました。しかし、この頃はまだ秀吉に関東に影響を与えるほどの余裕はなく、北条氏の北関東侵攻は勢いを増すばかりでした。そして、同盟を結んでいた会津の蘆名氏が伊達政宗に大敗して滅ぼされるに及び、南北から圧迫を受ける佐竹氏は滅亡寸前まで追い詰められることになります。

佐竹義宣の水戸城入城と退去

こうした情勢下、義重は実権を握ったまま子の義宣に家督を譲っています。転機はその翌年でした。豊臣秀吉がついに北条氏の征伐を開始したのです。佐竹義宣は、小田原へ参陣して石田三成の忍城攻めに従軍し、秀吉から常陸国や下野国の所領を安堵されました。そして、秀吉の後押しのもとで、小田原に参陣しなかった江戸氏や大掾氏系国人領主を一掃し、ついに常陸国の統一を果たします。この時、馬場城から江戸氏を追い出してここに本拠を移し、城を大改修して名も水戸城と改めたのでした。後の太閤検地により佐竹領は54万石余と確定され、佐竹義宣は豊臣政権で8番目の大大名となります。その後も石田三成との親交は続いたようで、佐竹氏の与力大名の改易騒動が起こった際、石田三成の内々の指示に従って上洛し、三成の取りなしにより処分を免れています。こうした石田三成の気遣いを恩義に感じていた佐竹義宣は、秀吉の死後、政権内部の対立から石田三成が武断派諸将から襲撃された際、いち早く動いて三成を脱出させたという話が伝わっています。そして、石田三成、上杉景勝が共謀して関ヶ原の戦いにつながる戦を起こした際には、上杉討伐へ向かう徳川家康の軍勢を上杉と共に迎え撃つべく国元で準備をしていたと言われます。しかし、父の義重は時勢が家康に傾いているとみて反対したようで、家臣たちをまとめることができなかった義宣は、常陸で形勢を見ることにしました。上田城を攻めていた徳川秀忠に少数の援軍を送ったという話もありますが、家康から人質を要求されてもきっぱりと断っています。やがて、関ヶ原で徳川軍勝利の報が届きました。佐竹義宣は、重臣を上洛させて佐竹の立場を説明させましたが、義宣自身は水戸城を動きませんでした。2年後、上杉、毛利、島津といった西軍に付いた大名の処分が落ち着いた頃、ようやく上洛して家康に謁見します。家康も機嫌良く応対したようで、この時までは、何ら表だった敵対行動をしなかった佐竹氏に咎めはないものと考えていた様子が窺えます。しかし、突然、出羽国秋田郡への国替えが命じられ、水戸城を退去することになっ

たのでした。一説にはこの時になって上杉との謀議が発覚したのではないかとされます。徳川実記には、家康が佐竹義宣を評した言葉が記されており、「今の世に佐竹義宣ほどの律儀者は見たことがない。しかし、あまり律儀過ぎるのも困る。」と言ったということです。かの石田三成と気心が通じていたことから、筋を通す真面目な人物だったのではないのでしょうか。秋田へ移った佐竹義宣は、大減封からの立て直しに力を尽くし、かえってその機会に譜代家臣を肅正して家柄や旧例に関わらず優秀な人材を登用し、浮いた知行で新たな政策実行を可能としました。また、大坂冬の陣では、木村重成、後藤又兵衛の軍と激戦を繰り広げ、多くの感状を受けて名声を高めました。後に継嗣問題が起きた際も、徳川秀忠から大いに信頼を得ていた佐竹義宣だからこそ特別な措置が許されたという評価もあるようです。

その後の水戸城

佐竹氏が退去した水戸城には、家康の五男の武田信良、次いで十男の徳川頼宣が入りますが、頼宣は駿府へ、後に紀伊55.5万石へ転封となり紀州徳川家の祖となります。代わって25万石で水戸城に入ったのが十一男の徳川頼房で、これが水戸徳川家となります。水戸徳川家の当主は参勤をせず常時江戸に住んだことから、水戸城本丸はほぼ倉庫として使われていたようです。明治になって廃城となった水戸城は東京鎮台の第4分営に使われたりしましたが、現在では本丸と二の丸はほぼ学校の敷地となっています。三の丸には弘道館が保存されていることから城址公園として整備されており、近年大手門も木造復元されました。また、二の丸と三の丸の間の道路、本丸と二の丸の間の鉄道はかつての大堀切を利用したものであり、ここを見れば水戸城の巨大さが分かります。偕楽園の梅も良いですが、弘道館や水戸城の遺構を見学するのも興味深いと思います。



本丸と二の丸の間の大堀切跡